看護大からこんにちは

健康に自信がある人の病気体験

わたしの74歳になる父が昨年の夏、東京の大学病院で、喉頭がんの手術を受けました。はじめて受診したときから入院手術まで3週間後というめまぐるしい展開でした。個人的な話で恐縮ですが、本日は、父の病気を通して考えたことを読者のみなさんと分かち合いたいと思います。

●病院と無縁の人生

父は、若い頃よりみずからの健康に非常に自信があったようです。20代のときに一度交通事故に会いましたが、それ以来、自分自身が医療機関にかかることなく人生の大半を過ごして来たのでした。晩酌とタバコは欠かしませんでしたがそれも度が過ぎるということはなく、毎日の質素な食事に満足して現代人のなやみである体重超過の問題にも無縁でした。

このように描写すると、健康問題に日頃より関心をもち、健康の維持に気を配って生きてきた人のようにも思えますが、真実はまったくの逆で、自分の体力頼み、健康や病気のことは極力考えないようにして生きてきたと言う方が正しいでしょう。

●健康の担い手は

おまけに、戦中生まれの父は、健康に気を配ることを「女々しい」と考えていたふしがありました。少しばかりの体調不良なら「気力で吹き飛ばす」とされてきた時代だったのですね。また、食事や生活をととのえることをとおして、健康を守るのは母や妻など家庭の中の女性の役割と信じ込んでおり、健康はじぶんで積極的につくるものという意識が希薄だったようです。

●年をとってからの健康問題

このような考えをもつ人は高齢者世代には決して少なくありません。父の場合は、高齢になるまで、じぶんの健康について真向かいに考える機会を逸してしまうことになったため、75歳を目前にしてはじめて重大な身体の不調を自覚し、深い混乱に直面したのでした。

いよいよ健康の問題が起こってきたという喪失感。長男である自分よりさきに弟たちが病に倒れ亡くなったことと重ねあわせて、人生の終幕について深い物思いを巡らしたようです。

●病院がこわい

また、それ以上にわたしたち家族が困惑したことは、患者になったことのない父は、医療を受けることについて、小さな子どものような素朴な考えしか持っていなかったということです。父は保健センターからの定期健康診査さえ無視していました。信じがたいことに、受付、問診、診察や検査の一連の流れも知らず、病院をただ恐れていたのでした。健康と病気に関する情報を自分とは関係ないものとして受け入れてこなかった父は、医学の進歩や医療サービスの改善、さまざまな医療費補助制度の整備について、なにも知らなかったのです。新聞雑誌に目をよくとおし、インターネットも使いこなす父ですが、医療についての情報は頭の中でふるいにかけられて、病院についての印象が、更新・変更されることはなかったのです。

●患者であることに慣れる

父のこのような不安を知って、母、弟、わたしの家族は、入院中、極力つきそい見舞うことにつとめました。わたしも休暇をとって、東京に泊まりがけで付き添いました。そのためか、父は、入院患者としての生活に急速に慣れていき、看護スタッフと若く熱意あふれるドクターたちに接して病院や医療についての印象を新たにして、予定より早く退院したのでした。

●退院後の課題

今は、手術で切除・再建した新しいあごのつかいごこちや感覚の変化に慣れることが、父にとっての重大事項となっています。あと、顔の変形は避けられませんでしたので、知人にいちいち事情を説明したり、道すがらの人に注視されたときの心のイライラに自己対処すること。また、鏡を見るたびに健康を損なったことを思い出すことになりますが、これはかなり心理的にこたえるようです。このような変化はありますが、今では、父は、手術前の活動レベルをとりもどし、地下鉄やバスにのって外出もする生活を送っているのでした。

新潟県立看護大学
講師　徐　淑子